

歴史を語る建物たち

秋田編
(第8回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

象潟町公会堂（にかほ市）



北海道開拓の篤志家が寄贈

にかほ市象潟町を縦貫する国道7号線を脇に入った住宅街の中ほどに、ひときわ異彩を放つ“白亜の殿堂”がある。昭和9年に建築された木造2階建ての象潟町公会堂である。

象潟公会堂は、同町出身の奥山角三（1864-1936）が私財を投じて建築し、町に寄贈したものである。

奥山の父親は、北海道余市でニシン漁業を営んでいた。奥山は19歳のとき、父親を頼って北海道に渡り、札幌の質屋で商いに精進した。折しも北海道開拓が軌道に乗っている時代であり、後に店主が病床に伏すと、奥山は店主に代わって事業を拡大していった。

また、奥山は、札幌区議会議員（現在の札幌市議会議員）や札幌商工会議所副会頭などの公職も務め、札幌政財界の重鎮として数多くの会社設立に携わった。現在の北海道電力もその一つである。

こうして北海道で社会的地位も財産も築いた奥山であったが、愛郷心は忘れることなく、昭和9年、北海道に渡って50年を機に、当時の象潟町役場の裏手に公

会堂を建て、町に寄贈した。設計は県職員の田中米太郎、大工棟梁は地元の金利右エ門が担った。なお、設計にあたっては、わが国の洋風建築の権威・辰野金吾



昭和30年代の公会堂。旧象潟町役場に隣接し、町議会議場としても使用されていたが、「昭和の大合併」で役場が移転（昭和30年）した後は象潟町公民館となった。
出典：郷土出版社『由利本荘・にかほの今昔』

博士が設計顧問を務めた秋田県記念館（大正7年竣工、昭和35年老朽化により解体）を参考にしたとされる。また、昭和10年には、東伏見宮大妃殿下が、当地の景勝探訪のため御台臨の際に、この公会堂で休憩された由である。

「社会教育の殿堂」が倉庫に

役場の裏手に建てられたことから、公会堂は町議会議場としても使われた。和服姿の町議会議員が、役場と公会堂を行き来していたのだろう。しかし、昭和30年、「昭和の大合併」で象潟町が周辺2村と合併し、新たな“象潟町”が発足すると、町役場は国鉄（当時）象潟駅近くに移転した。そのため、公会堂は象潟町公民館（兼図書室）として使われるようになった。

昭和30年代から40年代にかけては、婦人会や青年会活動が盛んで、映画の上演会、文化講演会のほか、成人式や結婚式も行われ、地元紙で「社会教育の殿堂」と報じられるほど多くの町民に利用された。

ところが、昭和45年に新たに象潟町公民館が建設されると、公会堂は公民館としての役目を終え、それ以降は地区の集会やお祭り以外にはあまり使われることがなくなった。その間も、外壁の塗り替えなど改修工事は行われてきたが、基本的には町の「使用目的のない」普通財産として、財政課の管理下に置かれていた。

昭和60年頃になると、公会堂は倉庫として使われるようになり、いつしか解体の話も持ち上がるようになったという。

音響の良さは偶然の産物か？

解体の危機を救ったのは、地元を中心とした音楽愛好者たちであった。かねてより公会堂の音響の良さに注目していた愛好者たちは、町に存続を訴え、町もそれに応えて整備を行った。その一つが、ステージへのピアノの設置であった。

当初予定されていたのは、自宅での練習や学校での音楽教材などに用いられる縦型ピアノであった。しかし、縦型ピアノでは“本物の”演奏会ができない、中古でもいいからグランドピアノを入れてほしいというのが愛好者たちの希望であった。

町にはグランドピアノを購入する予算がなかったため、愛好者の間で募金活動を始めた。現在も地元で音楽教室を開く眞嶋葉子さんにお話をうかがったところ、「家族、友人から地元住民まで多くの方々に寄付をいただき、1カ月後に“新品”のグランドピアノを町に寄贈しました」と当時を振り返ってくれた。

なぜ公会堂の音響がいいのか。眞嶋さんは、「天井が高いこと」と「床と天井が木であること」を理由に挙げる。以前、筆者が木造の工場を改装した映画館を取材したとき、「館内残響の周波数を測定したら、滑らかな曲線を描きました。これは、音の収束が良いと

いうことです。だから、この映画館は“音が優しい”と観客に言われます」という話を聞いた。おそらくこれと同じ原理ではないだろうか。

音響の良さはプロの音楽家も認める場所である。眞嶋さんの旧知である東京芸術大学准教授のピアニスト・有森博氏は、象潟公会堂の音響の良さにほれ込み、忙しい合間を縫って20年近く、毎年公会堂でピアノの演奏会を開いている。

公会堂を寄贈した奥山角三は、必ずしも音楽目的のみで建築したわけではないだろうが、音楽ホールとしても使えるよう、音響の良い造りを意識したのか、あるいは偶然の産物か、今も謎のままである。

「音楽の殿堂」を目指して

ピアノに限らず、これまで公会堂では多くの演奏会が開かれてきたので、聴衆の耳は肥えている。

眞嶋さんの縁で、東京のある有名な楽団が演奏に訪れた時のことだ。「田舎の素人相手」（眞嶋さんの言）に十分な練習は必要ないと思ったのか、演奏終了後に、友人が眞嶋さんに「あまり良くなかったね」とつぶやいたという。以来、眞嶋さんは同楽団からの公会堂での演奏申し込みを断っている。

なお、今年の4月から、象潟公会堂の管理はにかほ市財政課から教育委員会（社会教育課）に移った。市では、「移管を機に、公会堂をもっとアピールして、今まで以上に音楽活動を活発に行っていきたい」と意気込む。昨年、耐震工事を含めた大規模な改修が行われたが、ピアニストの有森氏は「改修でさらに音響が良くなった」と評価したそうだ。

ヨーロッパでは、住民と音楽が非常に身近である。中世に建てられた教会などでは毎晩のように演奏会が開かれ、住民は普段着で、奏者の息遣いまで感じられるような空間で、楽器の音色に酔いしれる。

秋田の小さな町にも、そんな場所があっている。

（フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史）



ステージに置かれたグランドピアノ（2代目）。子どもたちによる、ピアノ教室の発表会も行われる。ここから未来の音楽家たちが旅立つことを期待したい。（筆者撮影）